環境報告書への評価

他大学との意見交換

三重大学・岐阜大学との環境コミュニケーション

意見交換会の参加者
三重大学より、工学部 金子聡教授、科学的地域環境研究人材育成部門長佐藤邦夫客員教授、環境研究・保全部門立石一希助教、施設部から草一宏施設部長ほか3名、環境ISO学生委員会から6名

岐阜大学より、工学部 櫻田修教授、応用生物学部 村瀬哲磨教授、長谷川典彦特任教授、施設環境部から青木浩史施設環境部長ほか5名、ISO14001学生委員会から5名

本学より、環境安全衛生管理室 林瑠美子准教授ほか環境報告書2019編集チームから学生を含めた9名

環境報告書のさらなる充実を目指して

環境コミュニケーションの一環として、本学では毎年、環境に関する優れた取組をされている大学や企業との間で意見交換を行っています。この意見交換では、環境報告書を持ち寄り、学外からの視点で環境報告書の記載内容を互いに評価し学び合うことで、環境活動そのものや、環境報告書の記載事項のさらなる充実を図ることを目的としています。

今回は2019年8月30日に岐阜大学・名古屋大学の環境報告書の作成に携わる関係者が三重大学を訪問し、意見交換を実施しました。

三重大学は、ISO14001（環境マネジメントシステム）の認証取得、スマートキャンパスの推進など、環境に対して先進的に取り組んでいます。また、三重大学の環境報告書は、環境コミュニケーション大賞【環境報告書部門】で、計10回（2013年度からは6年連続）各賞を受賞しています。ペーパーレス化を推進している三重大学では、2019年度からの新しい試みとして、環境報告書の冊子を印刷して配布せずWeb版のみとする方針で作成しています。

岐阜大学は、ISO14001の認証を、附属病院を除く全学で取得しており、全学的なマネジメント体制を構築し、PDCAサイクルを回して環境活動の継続的な改善を進めるとともに環境意識向上のための教育や啓発活動についても取り組んでいます。2017年度、2018年度に引き続き3年連続の意見交換となり、これまでの経緯を踏まえたご意見をいただくことができました。

意見交換会での議論は、本学の環境活動の発展につながる大変有意義なものとなりました。いただいたアドバイスや三重大学、岐阜大学の先進的な取組を、今後の環境報告書の作成および環境活動のさらなる向上に役立てていきます。

名古屋大学環境報告書2019についての主な意見

(1)評価いただいた内容

- キャンパスマップは、どこでどういった活動が行われているかが非常に分かりやすい。(P5.6)
- 「電力のみえる化」について、使用量だけでなく金額に換算して表示していることなど、非常に参考になった。(P30)
- 各記事のタイトルが非常に分かりやすく、興味をひかれる。単に「○○コースを開設」「○○センター設立」というタイトルではなく、記事の中身を読んでみたくなるようなタイトルに工夫されている。
- 「学生の視点から」のページは学生も楽しんで読める記事である。学生が自分の大学に愛着を持つきっかけになると思う。(P21.42)
- 学生によるインタビューの記事の小見出しが一問一答形式で、しかも短文でまとめられていてとても分かりやすく、読みやすい。是非今後の参考としたい。(P15.16)

(2)改善提案を受けた内容

- 環境マネジメント体制とSDGsの関係性が分かりにくい。
- 環境報告書の編集に、学生メンバーがどのように関わっているかをもう少し記載してはどうか。
- 水使用量が増えた理由や、大学としての目標が明確でない。また、井水率も示してはどうか。(P36 にて対応済)
- 今年の特に注目すべきトピックスをまとめたページがあるとよい。

学生の環境活動などさまざまな視点での意見交換

環境報告書の評価や環境活動に関する意見交換のほか、環境報告書に掲載する記事内容の収集と選定の方法、環境報告書を読んでもらうための工夫など、幅広い視点での情報交換を行いました。環境活動の目標をどのように設定しているのか、大学全体の環境マネジメントをどのように推進しているかについては3大学それぞれに特色があり、特に活発に議論されました。三重大学で挑戦されている、パソコン、タブレット、スマホなど画面サイズに応じた表示となるWebアプリケーションを使用した環境報告書のペーパーレス化の取組については、初挑戦ならではの苦労もあるとのことでしたが、概ね高評価でした。これからの新しい環境報告書のスタイルの一つとして、定着していくことが期待されます。

環境サークルでの活動内容や環境報告書の編集への学生の関わり方など、学生同士の意見交換も非常に活発に行われました。自転車や家具などの不要物品のリユースの実施方法や、eco 検定（環境社会検定試験）の受験、環境サークル同士の連携、環境報告書での学生によるインタビュー記事の作成方法など、話題は尽きず、このような情報交換の場が求められていることを感じました。また、学生からの鋭い指摘により、本学の環境報告書の記載の誤りを見つけることができた場面もありました。意見交換会を通じて、学生の力は大学の環境活動にとってなくてはならないものであることを再認識しました。

環境活動などに関する意見交換・情報交換

環境報告書についての意見交換に続いて、先進的な取組で数多くの賞※を受賞した、三重大学のスマートキャンパスの見学を行いました。三重大学では、学長のリーダーシップのもとに、『世界に誇れる環境先進大学』という大きな目標に向かって教職員・学生が一丸となって全学的にCO_2排出量の削減と省エネルギーに取り組んでいます。再生エネルギーの有効活用、次世代空調と蓄電池の導入、それらを統括するエネルギーマネジメントシステムの導入、構成員の省エネ活動をポイント化する「MIEUポイント」の導入など、省エネにつながる非常に多くの省エネ設備・技術や仕組を導入されています。

見学の様子

今回はその中でも、風力発電、太陽光発電などの再生可能エネルギーによる発電設備、ガスを使った発電設備での排熱利用設備、蓄電池設備などを見学しました。再生可能エネルギーの場合、供給電力の変動が激しいため、電力需要の予測に基づく最適な運用計画が求められます。この安定した電力需給を実現しているエネルギーマネジメントシステムも見学しました。排熱利用のための配管設備や発電機など、普段見ることのない設備を間近に見ることができ、貴重な体験となりました。活発に質疑が行われ、風力発電量では国内の大学では1位であること、地域の気候に合った施策を取り入れていることなど、多くの情報交換・意見交換が行われました。

三重大学の風車

※：『地球環境大賞』（文部科学大臣賞、2013年度）
『省エネ大賞』省エネ事例部門（経済産業大臣賞、2014年度）
『グリーン購入大賞』（環境大臣賞、2015年度）
『地球温暖化防止活動環境大臣表彰』対策技術先進導入部門（2016年度）
『CAS-Net JAPAN サステイナブルキャンパス賞』建築・設備部門（2017年度）など

学生からのコメント

私たちは環境報告書編集チーム学生メンバーとして意見交換会に参加しました。他大学の環境に対する多様な取組や、環境報告書をより読みやすくする工夫などについての話を生の声で聞くことや、お互いの活動について話し合うことはとても興味深く、刺激のある経験になりました。

この意見交換会では学生の意見が求められる場も多く、意見を発表する楽しさはもちろん、三重大学・岐阜大学の学生からの意見や普段の環境活動についての話を聞いて環境に対する意識がより高まったと感じました。他の大学の学生とディスカッションを行う機会も多くはないので、将来に生かせる貴重な経験にもなったと思います。今までより深く横のつながりを築くきっかけになりました。

今後も学生の視点から環境について意識し、自分たちの意見を持っていきたいと思います。

（環境報告書2019編集チーム）
工学部2年　紅林 佑弥
工学部2年　京谷 桃花
農学部2年　大槻 峻介

第三者評価

本学の環境報告書の内容の充実を図るため、京都大学で環境報告書の制作に携わる浅利美鈴先生に、改善すべき点などコメントをいただきました。

京都大学の環境報告書作成には、初年から十数年間、形を変えながらも関わってきました。貴学の環境報告書は、毎年拝読し、勉強させていただき、クオリティの高さに刺激をいただいておりました。このような機会をいただき、とても光栄です。

＜SDGsラベリングが分かりやすさをアップ＞

今年の環境報告書を開いて、最初に目に飛び込んできたのが、国連SDGs（持続可能開発目標）の一覧図と、ご担当の伊藤早苗副総長のメッセージです。名古屋大学のこれまでの研究や活動が、すでに幅広いSDGsの項目に関連していることを確認されると同時に、統合的な取組を推進する意思を示されるとても心強いものです。目次にも、対応するSDGsがラベリングされており、大学を挙げての姿勢に期待が高まると同時に、うらやましくもなりました。実は、京都大学の環境報告書等においても、SDGsと各種取組の紐づけができないかと発言したのですが、さまざまなご意見の中で、叶いませんでした。各項目のSDGsラベリングも含めて読み進めましたが、ラベリングにより、理解や考察の手がかりが増え、分かりやすくなっていると感じました。また、報告者の立場からは、SDGsラベルをチェックすることにより、取組分野のバランスや、今後配慮すべき視点などが可視化されます。環境報告書が、環境管理のPDCAサイクルの一環であることを鑑みると、重要な作業であると改めて感じました。

＜SDGsラベリング項目の妥当性＞

何も改善点に関する指摘がないと、第三者意見として物足りなさを感じられると思いますので、何とか絞り出した意見を一つだけお伝えしたいと思います。SDGsラベリングがかなり細かな単位でなされていますが、特に「3　環境マネジメント・環境パフォーマンス」の各項目については、もう少しラベリングするゴールを議論・検討してもよいのかなと思うものがありました。

当然、正解があるわけではないのですが、複数人で議論を重ねていくと、いろいろな側面が見えてくると思います。議論で多様な意見を引き出すことそのものも大切なプロセスだと思いますので、今後の進化・深化に期待したいです。

＜参加型のスタイルを今後も大切に＞

環境報告書の順番として、教育・研究やコミュニケーションが前半にあるのも印象的です。それゆえ、いきいきした写真が多く、活力を感じる報告書になっています。同時に、環境管理に向き合う姿勢として、いわゆるソフト対策を大切にされていることも感じます。編集チームも、学生をはじめ、非常に多くのメンバーが協働されていることが分かります。これは、どこの大学でも継続してできることではありません。この、意欲的な報告書のスタイルは、ぜひ、持続していただきたいです。同時に、魅力あふれる報告書を、できるだけ多くの方に読んでいただけるよう、配布や発信方法にも期待したいと思います。

京都大学大学院地球環境学堂
准教授　浅利 美鈴

京大生がプラスチック問題の本質を考える活動「京都大学プラヘラス宣言」

京大でも「エコ～るど京大」が学生主役で奮闘中

全員参加型のサステイナブルキャンパス構築を目指して、学生を中心に、教職員や外部関係者も支えるネットワーク「エコ～るど京大」がさまざまな取組を展開。例えば、祇園祭とSDGsを考える「こんちきジーズ」プロジェクトや海洋資源保全のための「ブルーシーフード」普及活動、プラスチックとの持続可能な関係性構築を目指す「京都大学プラヘラス宣言」など。ユニークな活動に注目！

エコ～るど京大 ホームページ
https://eco.kyoto-u.ac.jp/

自己評価

1. はじめに

環境報告書の信頼性を高めるために、環境配慮促進法に基づく自己評価を実施しています。評価は学内構成員（教員２名、職員３名、学生２名）によって自己評価チームを構成し、「環境報告書に係る信頼性向上の手引き」※1 に準じて、「環境報告ガイドライン」※2 の記載項目を示した評価表を用いて実施しました。※3

自己評価委員会の様子

2. 評価結果

評価対象とした項目のうち、特に下記の点について評価・提案します。

- 幅広い環境活動の紹介や SDGs を組み入れたことは高評価でしたが、一方で「環境報告書」の趣旨を考えた場合、環境課題に関する目標設定と達成の検証は不十分な点があります。目標を設定しているのは CO_2 の削減のみであり、その他、水や廃棄物等、本書で挙げている環境課題について、具体的に行っている対策、今後に生かすための PDCAサイクルを回すなど、もう少し掘り下げた議論、考察を行うべきです。
- 環境課題に関する「長期ビジョン」を示すことが必要になってきています。SDGs のゴールとしても大学の長期ビジョンを示すべきではないでしょうか。
- 環境課題の抽出という点で、大気汚染に関すること、同様に生態系に関することが不足しています。特に生態系に関して、本学は、愛知県の生態系ネットワークのメンバーであるため、実施していく素地があると思います。
- 環境会計コストについて、考察が述べられていません。細分化され、蓄積されたデータは、適切、効率的な予算配分の考察に活用できるのではないでしょうか。
- PRTR の報告に関して、本制度の趣旨としての大気を含めた環境への排出量および廃棄物等としての移動量についての記載がありませんでした。
- PCB の処理について、全処理を達成したと評価していますが、実験系で使用したものが一部、未処理であると記載されています。評価との整合性を取るべきです。（P32、39 にて対応済）
- 水の使用量について、井水と市水の使用割合についても言及すべきです。（P36 にて対応済）
- SDGs については、説明書きがあった方がいいのではないでしょうか。（P2 にて対応済）
- 本学と民間企業や市民社会との連携について、本年は掲載がないようです。地方創生関連の事例として重要と思いますので、掲載があっていいと考えます。

※1：「環境報告書に係る信頼性向上の手引き（第2 版）」（環境省、2014 年5 月）

※2：「環境報告ガイドライン（2018年版）」（環境省、2018年6月）

※3：下記Web ページで、自己評価に関する詳しい内容をご覧いただけます。（2019年12月頃公開予定）
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt.html

3. 総括

編集方針にあるように、「幅広い環境活動を紹介」、「より若い世代に読んでもらえる報告書」等に重きを置いて編集している点は、ここ数年来継続している方針であり、ステークホルダーとして、学生や高校生らも意識したまとめ方であり、評価チーム全体として高評価でした。毎年の課題として、その興味深い報告書をどのように読んでもらうか、ということが環境コミュニケーションとして重要と感じます。興味深いトピックスの選択や広報活動に工夫を凝らしていることで、徐々に本報告書の認知度は高まってきていると感じます。継続的な取組と今後のより一層の工夫と活用を期待します。

ここで評価した項目は SDGs の展開も含め、大学全体の活動、方針に関係する部分が多くあります。そういった点で、この自己評価、あるいは第三者評価、環境コミュニケーションによる評価で指摘された課題は大学全体としてどのようにしてPDCA サイクルを回していくのでしょうか。今後はその見える化も含め、大学一体の取組がより一層必要になってきているように思います。

自己評価の中で、先端研究を行う大学は新規技術に関する責任・コンプライアンス、例えば、環境に対してどの程度問題があるのか、どう予防するのか、という考えを常に持つべきである、という意見も出されました。法の枠を超えて、配慮すべき環境課題はこれからも山積していきます。総合大学として、未来に希望ある研究、人材育成の継続に大きな期待をするとともに、上述した報告書自体の展開、活用を含め、今後ますますの環境に配慮した大学運営を進めていくことを期待しています。

学生からのコメント

環境報告書の自己評価委員会に参加したことで、本学が環境問題やSDGsに対してさまざまな取組をしていることを知ることができました。私たちも本学の一員として、さまざまな取組に貢献できるように、意識していきたいと思います。

文学部2年 関 陽香　工学部3年 角田 健輔
（TEDxNagoyaU 実行委員）

名古屋大学概要

(1) 大 学 名　　国立大学法人　名古屋大学

(2) 所 在 地　　〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町

(3) 創　　基　　1871年

(4) 総　　長　　松尾 清一

(5) 敷地面積（2019年5月1日現在）

①東山キャンパス	愛知県名古屋市千種区不老町	698,137 ㎡（借入含）
②鶴舞キャンパス	愛知県名古屋市昭和区鶴舞町65	89,137 ㎡
③大幸キャンパス	愛知県名古屋市東区大幸南1-1-20	48,463 ㎡
④東郷キャンパス	愛知県愛知郡東郷町大字諸輪字畑尻94	283,731 ㎡
⑤豊川キャンパス	愛知県豊川市穂ノ原3-13	155,732 ㎡
その他	宿舎や演習林など	2,001,115 ㎡（借入含）

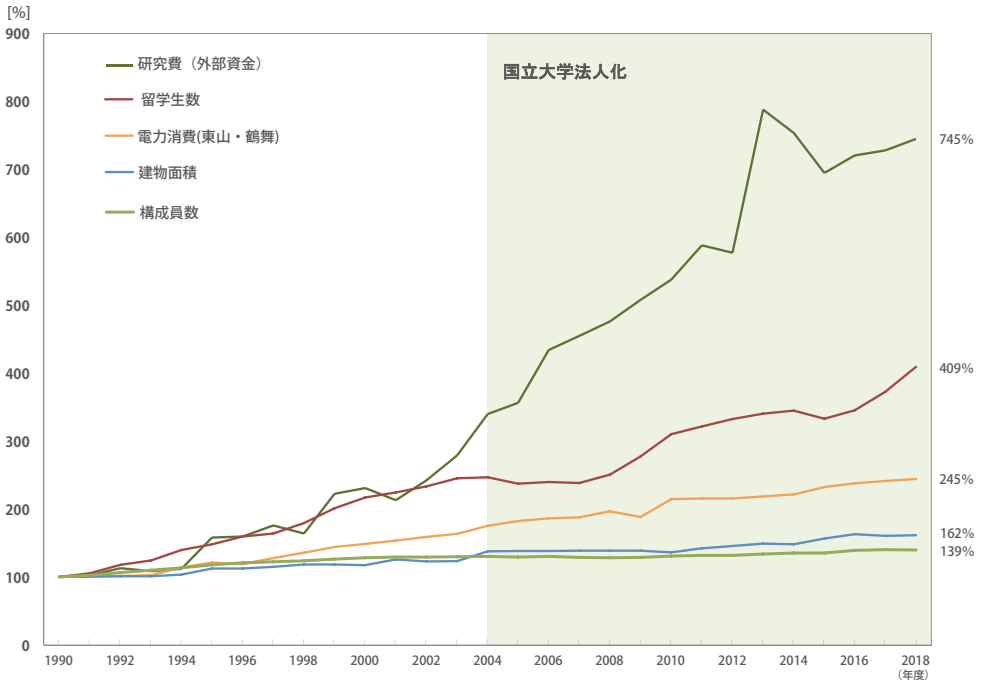
(6) 建物延べ床面積（2019年5月1日現在）　810,617 ㎡（借入含）

(7) 構成員数（2019年5月1日現在）

		男性	女性	計
教職員 ※		2,864	2,072	4,936
学部	学部学生	6,712	2,916	9,628
	学部研究生等	206	165	371
大学院	博士前期課程	2,673	1,066	3,739
	博士後期課程	1,023	586	1,609
	医学博士課程	534	196	730
	専門職学位課程	59	31	90
	大学院研究生等	117	92	209
附属学校	中学校生	118	119	237
	高等学校生	165	191	356
計		14,471	7,434	21,905

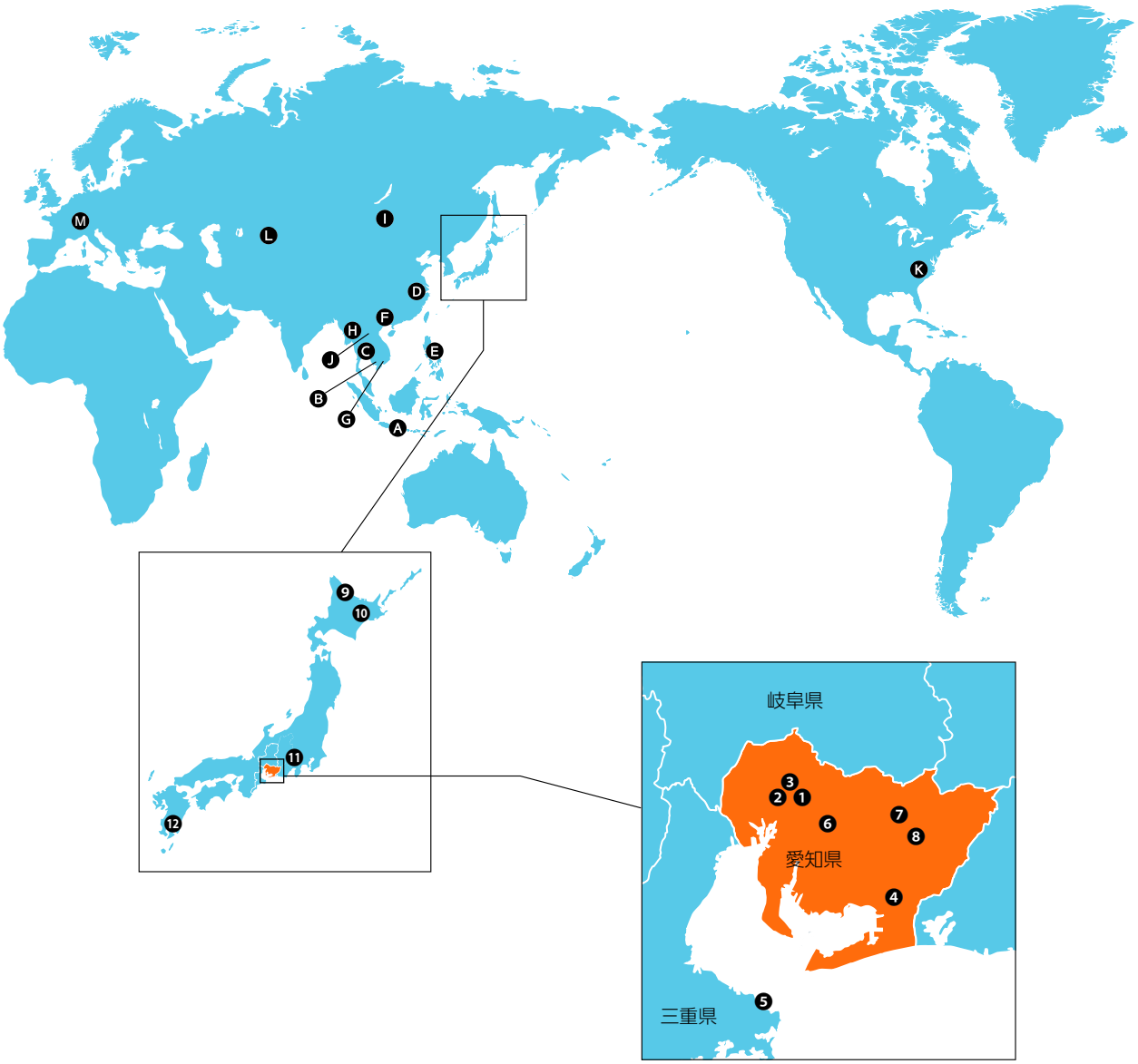
※:役員を含み、非常勤職員や派遣職員は除きます。

(8) 諸指標の推移（1990年度実績を100とした時の割合）



(9) 名古屋大学ホームページ　　http://www.nagoya-u.ac.jp/

キャンパス所在地・海外拠点一覧



海外拠点

注 名古屋大学海外拠点認定規程に定められたもの。

- Ⓐ インドネシア・日本法教育研究センター(インドネシア)
- Ⓑ カンボジア・日本法教育研究センター(カンボジア)
- Ⓑ カンボジアサテライトキャンパス拠点(カンボジア)
- Ⓒ バンコク事務所(タイ)
- Ⓓ 中国交流センター(中国)
- Ⓔ フィリピンサテライトキャンパス拠点(フィリピン)
- Ⓕ ベトナム・日本法教育研究センター(ベトナム・ハノイ)
- Ⓕ ベトナムサテライトキャンパス拠点(ベトナム・ハノイ)
- Ⓖ ベトナム・日本法教育研究センター(ベトナム・ホーチミン)
- Ⓗ ミャンマー・日本法律研究センター(ミャンマー)
- Ⓘ モンゴル・日本法教育研究センター(モンゴル)
- Ⓘ モンゴルサテライトキャンパス拠点(モンゴル)
- Ⓘ 名古屋大学モンゴル国立教育大学 子ども発達共同研究センター(モンゴル)
- Ⓘ モンゴル国立大学・名古屋大学 レジリエンス共同研究センター(モンゴル)
- Ⓙ ラオス・日本法教育研究センター(ラオス)
- Ⓙ ラオスサテライトキャンパス拠点(ラオス)
- Ⓚ 名古屋大学テクノロジー・パートナーシップ(米国)
- Ⓛ ウズベキスタン・日本法教育研究センター(ウズベキスタン)
- Ⓛ ウズベキスタン事務所(ウズベキスタン)
- Ⓛ ウズベキスタンサテライトキャンパス拠点(ウズベキスタン)
- Ⓜ ヨーロッパセンター(ドイツ)

国内主要キャンパス

- ❶ 東山地区
- ❷ 鶴舞地区
- ❸ 大幸地区
- ❹ 宇宙地球環境研究所豊川分室
- ❺ 理学研究科附属臨海実験所
- ❻ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 東郷フィールド
- ❼ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 稲武フィールド
- ❽ 生命農学研究科附属フィールド科学教育研究センター 設楽フィールド
- ❾ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 母子里観測所
- ❿ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 陸別観測所
- ⓫ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 富士観測所
- ⓬ 宇宙地球環境研究所附属国際連携研究センター 鹿児島観測所

名古屋大学環境報告書 2019

編集チーム

編集長
環境安全衛生管理室 准教授　林　瑠美子

環境安全衛生管理室 副室長 准教授　錦見　端

施設・環境計画推進室 教授　田中英紀

農学部・生命農学研究科 准教授　山崎真理子

環境学研究科 助教　奥岡桂次郎

生命農学研究科博士前期課程2年　岡本卓哲

名大祭実行委員会（経済学部3年）　中島　要

名大祭実行委員会（工学部2年）　紅林佑弥

名大祭実行委員会（工学部2年）　京谷桃花

名大祭実行委員会（工学部2年）　クルザド　ケンジ

環境サークルSong Of Earth（理学部3年）　剱持文伸

環境サークルSong Of Earth（農学部3年）　澤村志門

環境サークルSong Of Earth（農学部2年）　大槻峻介

施設管理部 施設管理課長（2019.3.31まで）　白井隆司

施設管理部 施設管理課長（2019.4.1から）　太田　剛

施設管理部 環境安全支援課長　山本直也

施設管理部 環境安全支援課 課長補佐（2019.3.31まで）　吉川昇孝

施設管理部 環境安全支援課 課長補佐（2019.4.1から）　大橋昌哉

施設管理部 環境安全支援課 安全衛生係主任　鈴木昇治

施設管理部 環境安全支援課 安全衛生係　角谷純子

施設管理部 施設管理課 施設管理係主任　藤井美樹

施設管理部 施設管理課 施設管理係（2019.5.1から）　吉原嘉子

評価チーム

環境安全衛生管理室 室長 教授　富田賢吾

環境学研究科 教授　香坂　玲

全学技術センター 技師　河内哲史

教育推進部 教育企画課 教務係長　小栗博行

施設管理部 施設管理課 課長補佐　安江朗人

TEDxNagoyaU実行委員会（工学部3年）　角田健輔

TEDxNagoyaU実行委員会（文学部2年）　関　陽香

評価チームメンバー

編集チームメンバー

環境サークル Song Of Earthの活動についてはP25-26に、名大祭実行委員会、TEDxNagoyaUの活動についてはP27に掲載しています。

表紙作品の公募について

名古屋大学環境報告書では、環境報告書をより多くの人に読んでいただくためのPR活動の一環として、2016年度から本学の学生・教職員を対象に表紙作品を公募しています。

2019年度においても魅力あふれる作品が多数寄せられました。ご応募いただいた皆様の自然や環境に対する思いがよく伝わってくる作品ばかりで、自然豊かな名古屋大学キャンパス内に目を向けた作品も多くありました。

この表紙を見て報告書を手に取った方が、本学の教育・研究などを通じたさまざまな環境活動に興味をもっていただくきっかけとなれば幸いです。

今回ご応募いただいた皆様と、大学生協をはじめ公募の周知にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

各入賞作品は表紙、P32、裏表紙に掲載しています。また、入賞されなかった作品も素晴らしい作品ばかりです。2019年度末まで環境報告書ホームページで紹介していますので、ぜひご覧ください。

2019年8月に上月正博理事（環境安全担当）から表彰状の授与を行い、入賞者に作品についてお話を伺いました

左から上月理事、大賞の宇都さん、優秀賞の西田さん、永渕さん、林編集長

名古屋大学環境報告書2019表紙応募作品の紹介
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt_2019entryworks.html

作品コンセプト

（表紙 掲載）

【大賞】　環境安全衛生管理室 宇都 明里さん

本学のシンボルである豊田講堂と、春夏の青々とした緑と青空の下、さまざまな国の学生や職員、近隣住民の方などが過ごす光景をイラストで表現しました。

（P32 掲載）

【優秀賞】　情報学部1年 永渕 紫峰さん

本学のキャンパス内にはたくさんの自然があります。いつも通っている道でもよく見るとさまざまな綺麗なものに気付きます。そういうありふれたものに安らぐことの大切さをコンセプトにしました。

（裏表紙 掲載）

【優秀賞】　理学研究科 博士後期課程3年 西田 由佳さん

人間の社会を永続的に豊かにするために、現在私たちに課せられた大きな課題は、かけがえのない地球を守っていくことです。それを成し遂げるためには、緑あふれる世界を育み、後世にもそれをつなげていくことが必要となります。卵形の地球は私たちが「守る」べき対象であることを表し、未来に向けて羽ばたく鳥は「次の世代まで自然あふれる世界を維持していく」ことを表現しています。

創立 80 周年を迎える名古屋大学は
東海機構設立など改革を進めています

発　　行／2019年9月
国立大学法人 名古屋大学
編　　集／名古屋大学環境報告書2019 編集チーム
編　集　協　力／(有)メディアード

お問い合わせ先／施設管理部 環境安全支援課
〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町
TEL：052-789-2116
FAX：052-789-5865
E-mail：e-report@adm.nagoya-u.ac.jp
http://web-honbu.jimu.nagoya-u.ac.jp/fmd/06other/guideline/e_rpt.html

次回発行予定／2020年9月

本書掲載記事の無断転載･複製を禁じます。
本冊子は再生紙を使用しています。